

# 天明二年「三春行楽記」前後(七)

—土山宗次郎と朝田伴七を中心に—

藤村潤一郎

一—五 (創価大学人文論集七号)

六—九 (同右九号)

一〇—一八〇 (同右一〇号)

一八—一八 (同右一一号)

一九 (同右一二号)

二〇—一八 (未完) (同右一四号)

ハ 武蔵国の市(続)

(児玉郡)

75 本庄宿「武蔵志」<sup>(129)</sup>に「市ハ二七ノ日、交易ハ絹同糸惣穀諸品ナリ、公儀二正四七十月、年二四度相場ノ書上アル地ナリ」とあり、「遊歴雜記」<sup>(130)</sup>、「武風土記稿」<sup>(131)</sup>、安政五年二月付、伊奈半左衛門役所宛「村差出明細帳」<sup>(132)</sup>、慶応三卯年六月

付、関東御取締御出役出役中宛「村差出明細帳」<sup>(1133)</sup>、「中山大概帳」<sup>(1134)</sup>も市日同様で、「市場一覽」の本荘町も同じで「生糸繭生絹生太織穀類」とある。

76 八幡山町 「武蔵志」<sup>(1135)</sup>に「市ハ五十三八、交易ハ五穀絹葛蕨其外諸品ナリ」とあり、「遊歴雜記」<sup>(1136)</sup>の市日も同様である。「武風土記稿」<sup>(1137)</sup>には「月毎に五八の日互市をなし、穀物絹細等の諸色を交易し」とある。安政五年、本庄宿「村差出明細帳」<sup>(1138)</sup>、慶応三年、本庄宿「村差出明細帳」<sup>(1139)</sup>の八幡山町市日は五十三八であり、「市場一覽」の児玉町大字八幡山は市日五八で「生糸繭生絹生太織穀類」とある。

77 児玉町 「武風土記稿」<sup>(1140)</sup>は市日三十であり、「市場一覽」の児玉町大字児玉は市日は同様で「生糸繭生絹生太織穀類」とある。

78 渡瀬村 寅七月付、岩鼻役所宛、渡瀬村組頭、百姓代「乍恐以書付奉願上候」<sup>(1141)</sup>には「当所之儀も先年々右両所同様二七二市相定、殊ニ藤岡ハ一六四九、八幡山ハ五十三八、当所ハ二七ト市日組合御極り御座候ハ、三ヶ所ニ而ハ一日も無間断市日有之」とある。

#### (秩父郡)

79 安戸村 原胤広編、文政八年戌(秩父郡)「武風土記稿」<sup>(1142)</sup>に「往昔は毎月五十の日に市立ありて」「享保の頃より市も廃し」「今は十二月廿五日のみ市立せり」とある。

80 坂本村 「武風土記稿」<sup>(1143)</sup>に市日二七で「小名落合と云る所に市を立て、楮皮を売買せり」とある。

81 本野上村 「武蔵志」<sup>(1144)</sup>には「市ハ二七、絹繭米麦交易アリ」とあり、「武風土記稿」<sup>(1145)</sup>は市日同じで「近郷より来り、郡中の名産絹烟草其他諸品を交易す」とある。「市場一覽」の野上町は市日同様で「生糸繭織物」とある。

82 大野原村 「武風土記稿」<sup>(1146)</sup>に「往昔は毎月四九の日に市を立て、交易の利潤ありしが、久しく廃して村からもさびれし由」とある。

83 国神村(金崎村、大淵村、野巻村合併)「市場一覽」に市日三八で「生糸繭織物」とある。

84 皆野町「市場一覽」に市日四九で「生糸繭織物」とある。

85 大宮郷「武蔵志」<sup>(1147)</sup>に「市ハ一六、絹横麻秩父黒豆米麦荳麦挽木炭外諸品交易アリテ繁昌ノ地」とある。「遊歴雜記」<sup>(1148)</sup>は秩父大宮の市日四九、秩父よしの町は一六であり、「よしの」は「よし田」の誤りとも考えられるが両者の関係は不明である。「武風土記稿」<sup>(1149)</sup>は「古より市立ありて、毎月一六の日を常とせり、或は十一月朔日より六日までは、妙見の祭にて賑はしく、近里遠境よりも群集せり、年分交易するものには、第一に生絹、横麻等を始め、庶物ともに其用たらざるは少なし」とある。「市場一覽」は市日一六で「生糸繭織物」とある。

86 下吉田村「武蔵志」<sup>(1150)</sup>に「市ハ三八、糸絹紙挽木炭楮穀菰タハコ諸品交易大宮ニ亜ク」とあり、「武風土記稿」<sup>(1151)</sup>は市日同じで「當郡第一の名産絹、煙草其他諸品交易をなせり」とある。「市場一覽」も市日同様で「生糸繭織物」とある。

87 上小鹿野村「武蔵志」<sup>(1152)</sup>に「市ハ五十、糸絹璽楮白布穀菰蕎麦挽木炭タハコ諸品交易大宮ニ亜リ」とあり、「遊歴雜記」<sup>(1153)</sup>の小鹿野は市日二七である。「武風土記稿」<sup>(1154)</sup>の市日は五十で「近郷のもの群集し、絹、横麻を始め諸品を交易す」とあり、「市場集覽」の市日は同じで「生糸繭織物」とある。

88 賛川村 元禄二年巳六月付、松平清三郎宛「武州秩父郡古大滝郷小物成差出帳」<sup>(1155)</sup>に「市場之事、大宮、小鹿野、賛川罷出申候」とあり、「武風土記稿」<sup>(1156)</sup>には「寛文七年より毎月二七の日市立せしが、今は廃して三月二日に雜市を立て、又は十二月廿二日、廿七日に市あるよし」とある。

(郡不明)

89 野田「遊歴雜記」<sup>(1157)</sup>に市日三八とある。野田村は足立、入間、高麗、比企の各郡にあり確定できなかった。

## 二 上野国の市

私が気付いた上野国の市は次の通りである。

## (群馬郡)

1 高崎 元禄九年(享和二年二月改)、群馬郡棟高村「村鑑」<sup>(1158)</sup>の高崎市日は「五日、十日、廿日、廿五日、晦日」とあり、宝暦五乙亥末春序、西田美英「高崎寿奈子」に「市日五十の日、毎月六日宛也、当国第一繁昌の大市なり。商売物造酒屋、酢醬油屋、呉服、絹綿、太物、穀問屋、肴問屋、小間物問屋、鍔物、其他品々卸小売見世。此町諸国商人大勢入込み、亭主々々も多くは他国の人なり」とある。市について昭和二年刊「高崎市史」<sup>(1160)</sup>は「寛文四年甲辰始メテ三伝馬町ニ開設セラ、三伝馬町ニ限ラレタル、余潤ヲ以テ伝馬業ヲ保護スル意ニ外ナラズ、然ルニ後年本町新町ハ衰微シタルモ田町ノミハ依然トシテ存スルハ、特産物ノ売買ナルニ因テナリ、市日ニハ冥加金トシテ一戸三文ツ、領主ニ貢獻ス、而シテ本町ハ繭糸(近郷ニテ絹太織ノ原料トス)市ヲ三八二、田町(古クハ真綿木綿織其他)絹太織市ヲ五十二、新町ハ際物ノ市ヲ二七ニ開ケリ」としている。

明和元年申一二月付、鵜飼左十郎、前沢藤十郎、岩出伊右衛門各手代宛、群馬郡池端村「村明細書上帳」<sup>(1161)</sup>の高崎市日も五十である。寛政改元立夏凡例、川野辺寛編述「高崎志」<sup>(1162)</sup>には、田町について「毎月五十ノ日市アリ、此市ニ限りテ絹・綿売買アリ、元禄三年庚午八月ヨリ他町ニテ売買スルコトヲ領主ヨリ禁制セラル、カ故也」、本町について「市ハ三八ノ日也、然レ共常ハナシ、唯七月十三日・十二月二十八日市アリ」、新町については市についての記載はみられない。

嘉永五壬子年閏二月付、組合取締役本庄、安中各宿問屋宛「高崎宿明細帳」<sup>(1163)</sup>には本町三八市、田町五十市、新町二七市とあり、同年月付、宿々取締役人衆中宛「安中宿銘細帳」<sup>(1164)</sup>の近辺市場には「高崎 絹麻綿」とある。

辰(安政三)五月付「中山道高崎板鼻安中松井田坂本五ヶ宿盛衰其外内調書上」<sup>(1165)</sup>には、前記高崎宿三町市日について「本町新町両市日者更ニ相立不申、五十田町市日者近郷各諸商人出人立多く、當国産物其外諸品売買仕、至而繁榮賑ひ候宿方ニ御座候」とある。

幕末期の「中山大概帳」<sup>(1166)</sup>に「市日本町月六度、田町月六度、新町月六度都合拾八度之市立有之」となっている。つぎに

明治二己巳年七月付、町内御役人中宛、田町小前惣代、組頭「以書附奉願上候」<sup>(1167)</sup>には、「御城下田町市場ニ而往古より絹綿糸売買仕、脇町々ニ而売買御嚴禁被成下置(中略)然処絹綿糸売買之義も追々相弛候ニ付、享保三年戌六月中、惣町ニ而絹綿糸売買不仕、先例之通田町五十市場ニ而売買可仕旨被仰付、(中略)年限隔絶ニおよび、綿製品柄変化いたし、売捌方不宜、自然製作方減少仕、絹而已ニ罷成候処、近年生糸莫大之製作ニ相成候間、絹織出し方次第第二減製ニ及候時勢与者乍申、五十市場衰微仕、必至難渋至極、(中略)依之今般五十市場ニおゐて、絹綿糸売買之義出精取扱度、且五十市者五里四方ニ而無之、左候得者三八市間々諸方市場江散乱可致、糸諸方より御城下五十市江持出し、所商人共者不及申、他方商人共茂弁利宜敷故、多人數立入可申、荷主等も右ニ準シ、是迄より多分ニ相成」とある。また明治三庚午年八月付、群馬郡引間村「銘細帳」<sup>(1168)</sup>に「近郷市場 高崎様御城下江道法式里 市日五日十日十五日廿日廿五日晦日」とある。「中山大概帳」の時期を確定する事が必要である。

明治一五年壬午一〇月序、土屋補三郎「更正高崎旧事記」<sup>(1169)</sup>式巻市日は「毎月五十ノ日六斎ナリ。絹ヲ第一ノ市ニシテ、近郷ノ農家ノ織モノニテ、携来リテ売代ナス」とある。同二五年三月刊、群馬県内務部、同廿三年「群馬県勸業年報」<sup>(1170)</sup>(以下「年報」と略記する)の市場には生絹、生太織売買の絹市の市日は五、十、生絹、繭売買の糸市の市日は三、八であり、毎年一二月西ノ日の西ノ市では三五七飜及雜品が売買とある。つぎに同三七年三月刊、田口浪三編輯「群馬県營業便覧附繁昌記」<sup>(1171)</sup>(以下「便覧」と略記する)の市日は五、十である。

2室田宿、下室田村 元禄九年、棟高村「村鑑」<sup>(1172)</sup>に「室田市日 朔日六日十一日十六日廿一日廿六日」とあり、天明三年卯一二月付、原田清右衛門役所宛、萩生村「村差出明細帳下書」<sup>(1173)</sup>には「市場之義室田上山江六里御座候、薪少々附出シ月二六度商売仕候」とある。なお上山は上里見村の神山の宛字ではないかと思うが今後考証したい。天保九戌年四月付、中室田村「村差出シ書上帳」<sup>(1174)</sup>には「当村々下室田市場江三拾里程」とある。また年不詳、室田宿糸絹繭世話人「覚」<sup>(1175)</sup>に「市日一六」とある。

3 長岡村 延享三年四月付「群馬郡長岡村々差出し帳」<sup>(1176)</sup>に「当村市場二而御座候」とある。

4 澁川村 承応三年午一〇月二五日付、安中御代官宛、澁川村名主、組頭、百姓「澁川村市日商売物立様之覚」<sup>(1177)</sup>に市日は上之町二日、十七日、中之町七日、廿二日、下之町十二日、廿七日であり、小万物、あい物、茶、塩、かち、太物、穀、繰綿、紙、炭、たばこ、馬商人、麻の商売座があり、「此外絹綿麻布板松木材木薪、惣而不依何二座定無御座候、上中下共二他所より入込、市場二而商売仕来り申候、薪之儀者市場二余り申時者、上より下江順々二押下ケ立来り申候、馬口勞馬売買之儀者、町割以前より之事故、馬問屋二余り与兵衛、権左衛門、馬宿爲致候二付、馬行錢喜兵衛取来り申候」とある。

元禄九年、棟高村「村鑑」<sup>(1178)</sup>の澁川市日も二、七である。延享三年寅二月付、下野田村上知「村差出シ明細書上帳」<sup>(1179)</sup>の澁川市場も二、七である。明和元年甲申閏一二月付、鵜飼左十郎、前沢藤十郎、岩出伊右衛門各手代宛、澁川村「明細帳」<sup>(1180)</sup>には「当村之義ハ市場二而二七歳、前々より市立申候、尤諸用等共ニ当村二而相達申候」とある。つぎに寛政一二庚申年四月付、伊香保村「村指出高反別銘細帳」<sup>(1181)</sup>の澁河市場の市日は二、七で「当所諸用等右村二而相達申候」であり、天保九戌年四月付「上野国群馬郡澁川村諸色書上帳」<sup>(1182)</sup>の市場についての記述は明和元年と同様である。また安政二卯年三月付、関東御取締御出役中宛「上州澁川村組合村々地頭性其外書上帳」<sup>(1183)</sup>には「当村之義者二七之日六才市立、炭薪類重市日二出申候」とある。明治二三年「年報」には澁川市として、二、七日が生糸蘭、一二、一七日が生太織、二二、二七日が雑穀、薪炭の売買で、毎年六月一二―二六日が桑市である。同三七年「便覧」<sup>(1184)</sup>の市日も二、七日である。

これより先、文化一四丑年六月一日付、御評定所宛、吉川永左衛門代官所澁川村馬問屋兼問屋群蔵「乍恐以返答書奉申上候」<sup>(1185)</sup>は馬市について応永頃からと申し伝えとして、「慶長年中井伊兵部少輔様御領分之節、当村町割有之市場二御定巷々月之内二七之定日二而六日宛市立、井馬市之儀者毎年三月六十月迄之間、諸国六売馬牽来、往古六馬問屋老人二而旅人引請」とあり、明治二巳年三月付、御生産局御役所宛、向領澁川村願人惣代百姓惣左衛門、差添人「乍恐以書付御願奉

申上候<sup>(1186)</sup>」は馬市を「文化度以前春在割与唱、八十八夜前後并六月中旬、七月、九月、以上四度馬數四千疋宛、奥羽、越国、馬牽来市相立候処、遠国渡世之旅人を借倒し、帰国も不相成様難渋爲致候間、自然与市衰微二相成、当時者前々之影も形も無之成行<sup>(1187)</sup>」として幕末には衰微したとしている。同年同月付、生産御役所宛、向領渋川村願人、右惣代「渋川村馬市仕法書」には春八十八夜前後、夏六月中旬、冬十月上旬として「市日數七日之間、馬引込引揚迄」<sup>(1187)</sup>とあるから、明治期にも存続している。

5 三倉村 正徳六年申三月付、御代官所宛「正徳六年上州群馬郡三倉村さし出シ帳」<sup>(1188)</sup>には「当村市日二日七日十二日十七日廿二日廿七日毎月六度薪かや塩ちや麦米などの類商売仕候」とあり、安永九年子五月付、岩出伊右衛門役所宛、三倉村「村明細書上帳」<sup>(1189)</sup>には「当村市場御座候、壹ヶ月二六度薪木市少々宛二七二相立申候、依之御水帳二者町屋敷と御かた書御座候」とある。天保一四卯年正月付、岩鼻役所宛、大柏木村「村差出明細書上帳」<sup>(1190)</sup>は「市場当村の三ノ倉迄四里、持林二而薪を取附出し塩茶之価二仕候」とあり、明治二年付、民政役所宛、三倉村「明細帳」<sup>(1191)</sup>に「当村之義三ノ倉町ト相唱市場御座候、一ヶ月二七六度生糸蟬其外材木炭屋根板等市立申候」とあり明治になり生糸がみられる。

6 白井村 元禄一三年辰二月付、御代官宛「上野国群馬郡白井領白井村差出」<sup>(1192)</sup>には「当村市場二而御座候、月二六市、但五日十日十五日廿日廿五日晦日、右ハ馬草、薪、万石物、塩、茶、木綿、麻布、其他品々売買仕候」とあり、明和四年亥一二月五日付「市記録書付之事」<sup>(1193)</sup>に上、中、下ノ丁で運用とある。

7 八木原村 寛延二年巳六月付、高井村「銘細帳」<sup>(1194)</sup>に当村近郷市場として「八木原村江巻里半程」とある。明治二三年「年報」には有馬、八木原、半田が合併した古巻村に桑市が毎年六月三―五日とある。

8 惣社町 元禄九年付、棟高村「村鑑」<sup>(1195)</sup>に「惣社市日、三日八日十三日十八日廿三日廿八日」とあり、宝永二年酉八月付、松田弥五兵衛内宛「上野国群馬郡金古村差出シ井御尋書之帳」<sup>(1196)</sup>は惣社町について市日は同様で「六才市二御座候、此町二而も諸用等相達申候」とある。寛延二年「銘細帳」<sup>(1197)</sup>には「当所市場毎月三日八日十三日十八日廿三日廿八日立申候、

薪雜穀塩茶秣土売買仕候」とある。延享四年付、大久保村「御問御書帳」<sup>(1198)</sup>は養蚕、絹について「売場之儀は高崎市、総社町市にて相払申候」とし、明和元年申一二月付、鵜飼左十郎、前沢藤十郎、成瀬彦太郎手代宛、池端村「村明細書上帳」<sup>(1199)</sup>の惣社市日も三、八で、明治三庚午年八月付、引間村「銘細帳」<sup>(1200)</sup>の惣社町市日も同様である。

9 倉賀野宿 寛政一二庚申年十一月付、御分間御絵図面御用御役人中宛、倉賀野宿問屋、年寄「五海道絵図面御仕立目録」<sup>(1201)</sup>に「当宿市日七月九日、十二月廿四日両日計市有之、外二月並之市無御座候」とあり、「天保十四年 中道宿村大概帳 倉賀野宿明細帳」<sup>(1202)</sup>、弘化元辰年一二月付「上野国群馬郡倉賀野宿明細書上帳」<sup>(1203)</sup>にも大略同様の記事がある。

10 元惣社村 都木初美所蔵文書にある宝暦一四年申三月付、向領代官役所宛、向領元惣社村百姓代、組頭、名主「乍恐以書付奉願上候事」には以前から「上郷山方村々より薪附込、日々売買仕候、極月に茂罷成候へば門松等迄附込、下郷村々より参り日々売買仕候へ共、市日と申儀無御座」とあり、明和九年辰七月付、御代官役所宛、向領百姓代、組頭、名主「乍恐以書付奉願上候事」には「御他領村々より薪日々附込商売仕、又は山添之村々よりは糠藁等を以薪と交易仕来り候処」として「老ヶ月に六度宛日を限」市を願っている。安永二年月日付「乍恐以書付奉願上候事」にも薪市日を願っている。昭和五〇年一〇月刊「前橋市史」<sup>(1204)</sup>には「近世においては、一・六の六斎市が立っていたが、後には季節的になり、近年は十二月二十六日の暮れ市だけとなったが、戦前<sup>(注太平洋戦争前)</sup>までは薪市が開かれ、俗に「元総社のボヤ市」と呼ばれていた。榛東村方面の山村から雑木のマキ、ボヤを馬につけてきて、宿の軒場に積んでおき、元総社以南の近在の人々がこれを買いにきた。時には、元総社以南の地方が水田地帯のため、山村の藁不足を補う、藁薪の交換なども近年まであった市である」とある。

11 上芝村 (慶応二年) 六月一日付、下小島村肝煎名主宛、山崎只右衛門、桑野喜平次、竹内曾右衛門、三浦郡蔵「覚」<sup>(1205)</sup>に「上芝村糸市明後十三日相始候二付」とある。

12 前橋 「前橋市史」<sup>(1207)</sup>は市の成立を元和五十七年以前に四、九市日が出来たとみている。貞享元年九月二九日序、古市



剛撰「前橋風土記」<sup>(1208)</sup>の市肆に「前橋 市毎月六次、方六七里農商聚爲群、城中士不許行」、府城の本町に「富商聚居、毎月以四九之日爲市、常設貸廬披厨品之廬備常用也、伝駅邸館及賓賓館之所在也」とあり、元禄九年付、棟高村「村鑑」<sup>(1209)</sup>の前橋市日も四、九で、寛延二巳年二月付、井田庄右衛門宛「上野国勢多郡前橋領不動堂村御書上帳」<sup>(1210)</sup>の前橋市日も同様で「此市二而品々売買仕候」とあり、宝暦三年申九月付、本店願主、後見、組頭、名主他「乍恐口上書を以奉願上候」<sup>(1211)</sup>には「先年今本町通り壱ヶ月二六度之市日有之」とある。松井家文書「諸用証文留」<sup>(1212)</sup>の天明元丑年六月付、当時役人「本町惣連判市場願書」には「右者細ヶ沢町堅町北代田村散市糸買并其外手買等迄も本町上中下市場へ引入申度由願上候、本町於も下市場之節下り可申候由言上申候」とあり、前橋でも本町以外で糸買の散市がある事、本町の上、中、下町で下町の時に問題が生じている事を示している。また松井家文書の寛政五癸丑五月付、勝山喜兵衛、福野敬右衛門宛、組頭「乍恐口上之覚」<sup>(1213)</sup>には「御当所之義ハ近国中之大市」とあり、六才見世について借家同前で町役を負担する。「諸役ヲ相勤只人別ニ無之と申分、借家茂同前之義」とあり、城主の「川越引越已来者、四九市日之外者農業稼ニ而茂不仕候而者、取続出来不仕候ニ付、只今ニ而者六才市ニ罷出商売仕候義ニ御座候」としている。

つぎに嘉永六癸丑年四月二二日付「議定」<sup>(1214)</sup>は棧商売の者と糸屋一同のものが、その内に「素人より市日々々之前橋市中江持参候糸在々之店或ハ辻買等決而致間敷事」の項がある。

松井家文書<sup>(1215)</sup>には文久三年二月七日の条に馬市について、鍛冶町馬口労頭、与頭名主から嘉永二酉年七月五日に七カ年再興を許可され紺屋町鍛冶町で春秋二度立てられ、ついで安政三辰年から七カ年継いできたが、更に当年から七カ年継を願っている事実がある。明治二三年「年報」には、細ヶ沢町に馬市が五月二〇日、九月二〇日より各三日間とある。

また「年報」には、前橋町は前橋市として雑品を売買し市日四、九、桑市として毎年季節に二〇日間、堅町は堅町市として雑品を売買し市日四、九、立川町は繭市として市日四、九、桑市として季節に一〇日間、紺屋町は青物市として毎日、桑市として毎年五月二〇日―六月二〇日の三〇日間、小柳町は桑市として毎年季節期日届出、向町は桑市として毎六月二

九日―七月二〇日の二日間、細ヶ沢町は馬市として五月二〇日、九月二〇日より各三日間とある。

同三七年「便覧」<sup>(126)</sup>には「桑市といへるものあり。(中略)。又馬市場あり、諏訪町に開かる。前橋青物市場は、堀川町に設けられ、日々午前八時より午後三時まで、開市売買を行ふ。商品は佐渡、群馬二郡及び、館林東京等より輸入す。其の他に、紺屋町青物市場と称するものあり。又前橋繭市場株式会社の設ありて本市の特産たる繭の、集配売買に便なり」とある。

12 前橋 A 米延買売場、御米売捌場所 「前橋藩松平家記録」<sup>(127)</sup>の宝暦七年八月九日の条に次の記述がある。

江戸浅草駒形町家主

清六事

忠四郎

右者願書二而、本町町人共証文二相立、於御当地米致売買度之旨相願二付、可申付旨野田弥左衛門へ早川修理及差図、則願書左記之

乍恐書付を以奉願上候事

一 江戸浅草駒形町家主忠次郎<sup>(128)</sup>申上候、御当地商事繁昌成土地二御座候二付、私存知候付此上御願申上候趣意ハ、近郷町方米町人御当地江入込米売買取引仕候二付、私井御当地米商人石仕ニて米延買売場より建、市日毎月定日ニ売買仕度奉願上候

一 江戸表二而茂石廻売買之義、御願申上候もの御座候処、当春中御吟味之うへ被 仰付、只今売買式ヶ処相立売買仕候、御当地江茂右売買取建候ハ、江戸商人とも注文等を以入込、別而繁可<sup>直説</sup>仕候、乍恐奉存候事

一 右之趣被爲聞召分、願之通被 仰付被下置候ハ、石商口銭之内にて壱割爲冥加年々上納可仕候、尤上納仕方之義ハ売場帳面月々奉御改受上納可仕候、此義被仰付被下置候者乍恐万代不易之御義奉存候、何分願之通被仰付被下置候

ハ、難有奉存候、乍恐爲御伺書付差上申候、以上

江戸浅草駒形町

宝曆七年丑七月 家主清六事

願主

忠 四 郎

本町証人

竹内勘 六

同

新井権四郎

同

同 義兵衛

同

正田茂 助

家主

善右衛門

中 寫 又 治

右願之通被仰付  
被下置度奉存候

嶋野伝兵衛

已上

勝山義右衛門

町方御役処

## 米延売買仕様

一 米百表二付但双方差金三両ツ、御賦銀五匁ツ、

一 石立貳拾二付但双方差金金壹両貳分ツ、御賦銀貳匁五分ツ、

右之通相定、来ル何日ニ米可相渡旨商人とも双方了簡金を以取極メ、右日限ニ取引仕候事、尤相場之義

一大坂会処定日 十八日  
廿二日

一江戸 同断 廿六日  
廿九日

一前橋 四

右三ヶ処会処相場平均仕相庭相立申候、以上

丑八月

これは宝暦七年春に江戸で米延売買会所が二カ所許可になり、建っているが、具体的な事は不明である。そして前橋では近郷町方米商人が入込み米売買を行なっているので、江戸商人が前橋を江戸に結びつけて延売買が許可されている。これは江戸、前橋両地の商人の協力関係を示している。会処の相場は大坂、江戸、前橋三カ所の平均であり、背後に米相場を扱う飛脚網の存在している事を示している。

「堂島旧記」<sup>(1218)</sup> 卷二にあるこの前年の同六年子二月二日付、御当番宛、江戸通旅籠町忠右衛門、同所元湊町権右衛門「米市場仕様書」は城州伏見で大坂米市場同様の正米并帳合米商会所を立てる願書であり、これについての翌七年丑三月一二日付、御奉行宛、米方年行司「乍恐口上」は大坂側が伏見に会所が出来ると大坂市場が衰微するとしている。

ここに見られる江戸、前橋、伏見の出願は一連の動きと考えられ、他の城下町などについても同じ動きがあったかどうか

か調査が必要である。

つぎに「藩日記」<sup>(219)</sup>の文政六癸未年十一月四日の条に、町方御役所宛、願人桑町津久井与兵衛、連雀町高山文六郎、両町名主、松井権四郎、福野勝次郎「乍恐以書付奉願上之事」には、御藏米、町米売買に従事している前橋の穀問屋が他所市におされているので、御藏米の御米売捌処を建てて事を願い、その効果は御米、町米共々値段が引立ち農家のためにもなるとしている。その仕法は次の通りである。

一御上様御米捌之義者、代金三十日延、又者六十日延ニ而米取渡仕度奉存候、但売買致米貳百五拾表二付口銭双共銀五匁ツ、二出シ仲買之者を受取、右拾匁之内

一銀貳匁御上納銀、三匁仲買口銭、銀貳匁五分筆墨紙入用、銀貳匁五分仲買江割返シ

一建場之儀者尾張米江戸表ニ而売捌相場を元に相定流用可致事、但尾張爲登米々三升格上ケ矢張り江戸と連係した売捌所である。これは許可されている。

13 紅雲分村 明治二三年「年報」には、桑市として季節に一〇日間とあり、青物市として蔬菜菓物を売買し、七月一日—八月三〇日とある。

14 鶴光路村 「年報」に桑市として、季節に届出とある。同村は近世では今宿村、善光寺村である。

15 漆原村 「年報」に桑市として六月一日より五日間、六月九日より三日間とある。

16 大久保村 「年報」に桑市として五月三〇日—六月八日の一〇日間とある。

17 上校村<sup>(マ)</sup> 「年報」に六郷村大字として、桑市が五月二八—三〇日の三日間とある。六郷村に属し「上」がつくのは上小島村、上並榎村、上小埦村であり、確認出来ない。

18 棟高村 「年報」に桑市として六月二—六日の五日間とある。

19 綿貫村 「年報」に桑市として六月一—七日の七日間とある。

20 引間村 「年報」に桑市として六月一―三日の三日間とある。

21 正観寺村 「年報」に桑市として六月一―三日の三日間とある。

22 神戸村 「年報」に桑市として六月二―八日の七日間とある。

23 本郷村 「年報」に桑市として六月二―六日の五日間とある。

24 西明屋村 「年報」に桑市として六月七―一三日の七日間とある。

(勢多郡)

25 大鰯 貞亨元年序「前橋風土記」<sup>(1220)</sup>の市肆に「大胡 市毎月六次」、府城の大胡町に「本町 在于古城之東、道通南北矣、北名上宿、南曰下宿、有市三八之日爲期、群商聚于是」とあり、天明六年正月付、御役所宛、泉沢村「銘細書上帳」<sup>(1221)</sup>の近郷市場に「大胡江式拾町」とある。明治五壬申年正月付「上野国勢多郡樋越村明細帳」<sup>(1222)</sup>に従当村市場として「大胡町道法拾町余」、同二三年「年報」に雑種市として雑品を売買し市日は三、八日であり、同三七年「便覧」<sup>(1223)</sup>の市日も同様である。

26 山上町 貞亨元年序「前橋風土記」<sup>(1224)</sup>の市肆に毎月六次とあり、明治二三年「年報」には山上村として、桑市は六月一―二五日の一五日間、雑種市として雑品売買が季節に一二日間とある。

27 花輪村 宝暦六年子一〇月付、会田伊右衛門役所宛、花輪村「村差出明細帳」<sup>(1225)</sup>に「当村市之儀、朔日六日十六日廿六日、壹月二四日ツ、二相来立り申候」とあり、天保一子年一〇月付、御普請役宛、花輪村名主「覚」<sup>(1226)</sup>には「当村市米相場」を書上げている。明治二三年「年報」には花輪市として雑品売買が毎年一月二六日、雑種市として雑品売買が一、六日である。

28 森下村 元禄七年戌二月一日付、字敷弥市太夫宛、森下村名主、組頭「乍恐以口上書を御訴訟申上候御事」<sup>(1227)</sup>に「市立可申儀ハ、沼田領西東山付之者右々我等共方江ハ、何とそ其村ニ市御立可被下候、板樽木すミくわからいんくわへつた

するす立うす、松木小角等売申度与申候、其上柿苅之儀も其村ニて売申候得者<sup>勝手ニ御座候と申候、殊ニ白井、渋川之商人申候ハ、茶、綿、塩諸事商内もの付届、諸事かわせに仕度と願申候」とあり、この願に対して元禄七年戌六月朔日付、名主、組頭宛、森下町五人組頭源左衛門他「相定申事」<sup>(122)</sup>に「諸事商物市場江御出シ可被成候」とあるから市は立てられている。</sup>

29 駒形新田 天保一二辛丑年正月付、駒形新田「銘細帳」<sup>(123)</sup>に「当町市々ヶ月六度五十」とあり、明治三三年「年報」には糸繭市として生糸繭売買で市日三、八、桑市として季節に届出とある。

30 上野村 元禄一一年戊寅八月付、加嶋喜兵衛「上野国群馬郡中里村差出帳」<sup>(124)</sup>に当村近所市場として「上野へ巷里」とある。

31 萩原村 「年報」に萩原市として雑品売買を毎年八月一日とある。

32 深津村 「年報」に桑市として六月一〇—二五日の一五日間とある。

33 新屋村 「年報」に桑市として六月一八—二七日の一〇日間とある。

34 大室村 「年報」に桑市として五月二五日—六月八日の一五日間とある。

35 筑井村 「年報」に桑市として六月二—二二日の一一日間と、季節に届出と、重複している。

36 荒口村 「年報」に桑市として季節に一〇日間とある。

37 大屋村 「年報」に桑市として季節に一〇日間、養蚕器具市として三月三日、四月三日、五月一日より三日間とある。

38 江木村 「年報」に桑市として季節に届出とある。

39 下大島村 「年報」に桑市として六月一三—一九日の一七日間とある。

40 今井村 「年報」に桑市として季節に届出とある。

41 女屋村 「年報」に桑市として六月五日—一九日の一五日間とある。

42 上泉村 「年報」に桑市として季節に届出とある。

43 米埜村 「年報」に桑市として季節に届出とある。

44 原之郷村 「年報」に桑市として季節に届出とある。

45 田口村 「年報」に桑市として季節に届出とある。

46 飯土井村 「年報」に桑市として五月二六日から一〇日間とある。

47 新井村 「年報」に雑品市として市日五、一〇である。

(利根郡)

48 沼田町 天和元酉歳「上州利根郡沼田領郷村品々記録」<sup>(1231)</sup>の沼田領立市候町之事に沼田町は一月六度宛とあり、「真田

伊賀守家中役人諸事奉覚書」<sup>(1232)</sup>の寛文一〇年戌四月一七日付「覚」には城下町市日に軽き侍共が買求め見物する事を停止し

ている。元禄九子年四月付、沼田御役所宛、中町檢断、名主、年寄「手形之事」<sup>(1233)</sup>には「一絹真綿布之義、店借り之義ハ不

及申ニ、我持之定店ニ而茂、市場江罷出相調可申候、市場無之之節ハ一切調申間敷事」「一惣而穀物之義、是又猥りニ商売

仕間敷候、但定店之義見セ之内ニ箱半切ニ入候而、他町之市ニ構無之売買可致事」とある。寛保二戌年一〇月付「上野国

利根郡沼田町明細帳」<sup>(1234)</sup>に「市場之儀」<sup>(1235)</sup>老ケ月六日宛立申候、上町四日十八日、中町十四日廿八日、下之町八日廿四日」とあり、文政

三辰年六月付「沼田町明細帳」の市場も大略同様である。

49 大原新町、大原町 慶長五年二月一二日付「真田信幸朱印状」<sup>(1236)</sup>に大原新町は「町中売買諸やく赦免事」とあり、元禄

一二年卯一二月付、宛欠、上州勢田郡日影郷村他二四カ村各名主「乍恐以書付御訴訟申上候事」<sup>(1237)</sup>に大原町は「先規之通市

場 仰付被下置候ハ、」とある。つぎに明治元辰年一二月付、地頭役所宛、大原村役人惣代、奥書地頭役所「乍恐以書付

奉願上候」<sup>(1238)</sup>に「去ル慶長五年二月十二日当村市場二被 仰付候」「今般 朝政御一新二付」「前々之通り市場二被仰付候

様」と願ひ許可されている。



50 須賀川村 万延二酉年三月日付、宛、差出欠(花咲村他四カ所)「乍恐以書付御届奉願上候」<sup>(1239)</sup>に「須賀川村二而新規馬市場願建之儀ニ付」とある。

51 沼須新町 寅(慶長一九年カ) 二月一〇日付「定(真田信幸朱印状)」<sup>(1240)</sup>に「沼須新町市可立之事」とある。

52 月夜野町 天和元酉歳「上州利根郡沼田領鄉村品々記録」に月六度宛とあり、天保九年戌六月付、地方役所宛、月夜野町役人惣代「乍恐以書付奉願上候」<sup>(1241)</sup>に「当町之儀者往古真田伊賀守様御取立之市場二而(中略)、追年市場次第第二衰微ニおよひ」「先前仕来通り祭礼仕、市場相続相成候様」とある。昭和三六年刊「桃野村誌―月夜野町誌・第一集」<sup>(1242)</sup>には「月夜野町には三・七の六斎市がたつていた」「市に並べられたものは炭、米、塩などであつたが、特に石倉からカラ傘、下駄などが売出され、塩は越後から運ばれて来たという」。顧客は利根西部で、一部は利根東部である。「特に馬市はにぎやかなもので、この時は遠く越後方面からも買手が来たという」。維新後関所廃止、架橋自由などで次第にさびれ遂に消えたとある。

### (碓氷郡)

53 板鼻宿 貞享元年「前橋風土記」に板鼻町に市毎月六次とあり、元禄九年、棟高村「村鑑」<sup>(1243)</sup>に市日「四日九日十四日十九日廿四日廿九日」とある。辰(安政三年)五月付「中山道高崎板鼻安中松井田坂本五ヶ宿盛衰其外内調書上」<sup>(1244)</sup>に「当宿市日四九之日二御座候処、右定日二者御座候へ共、二月廿九日、五月四日、七月九日、十二月廿四日廿九日、右五日之外其余者年分市相立不申候」とあり、「中山大概帳」<sup>(1245)</sup>の板鼻宿の市も安政三年と大略同様である。明治三七年「便覧」<sup>(1246)</sup>は板鼻宿町「毎月二七の日を以て、市場を開く」とある。

54 上里見村(神山村) 貞享元年「前橋風土記」に上里見町は市毎月六次とある。宝暦一〇年辰十一月付、宛欠、訴訟人群馬宿下室田宿各領分、知行所村役人間屋、相手碓氷郡神山村、中里見村、下里見村、上大島村各村役人「乍恐以書付御訴訟奉申上候(新馬継仕並下室田市へ指障候出入)」<sup>(1247)</sup>には「下室田市ノ儀往古ヨリ一日六日十一日十六日二十一日二十

六日一ヶ月二六日宛相立テ来リ申シ候 然ル処当三月神山村ニテ右下室田市日ニ神山ニ新市ヲ立テ山里村々へ下室田市ヲツブシ神山村ニテ新市立テ候旨ヲ触レ廻シ」<sup>(1248)</sup>「下室田市日ヲ引キカエ三日八日十三日十八日二十三日二十八日三立テカエ」、松平撰津守領分神山村が「御同領ノ川浦村ヲ引クニツキ当所ノ市ニ障リ」と訴えている。これにつき同一二年午八月一日付、御評定所宛、訴訟人・相手連名「指上申一札之事」<sup>(1248)</sup>には「下室田宿ノ儀天和三亥年遠山与左衛門様御割付ニモ相戴キ六日ノ市日相立テ材木板貫広薪木売買致シ碓氷郡川浦水沼岩氷ソノ外村々ヨリ持出シ商イ候処」とあり、また「神山市ノ儀前々ヨリ三八ニテ伊奈半左衛門様御代官所ノ節村差出帳ニモ相戴リ新市ニテハコレ無ク候」としている。

55 上野尻町(村) 56 下野尻町(村) 57 谷津町(村) 安政二卯年六月付、(安中宿) 伝馬町、下野尻町、谷津町、上野尻町各町役人、問屋「爲取替議定之事」<sup>(1249)</sup>に「今般谷津上野尻下野尻江新市被仰付候ニ付、一ヶ月六済一六之日相建可申事、但、朔日上野尻、十六日上野尻、六日谷津、廿一日谷津、十一日下野尻、廿六日下野尻、三町市之節茂其市場ニ而売買可申事」、「谷津上野尻下野尻市之節商人止宿之儀者、是迄之通伝馬町に止宿可致事、但蘭商人之分止宿は不相成候得共、其日商取引不相済分は蘭宿ニ限り夜明シ可致、外宿ニ而者不相成(下略)」とある。明治三三年「年報」には、上野尻は屑物市として蘭、糸、屑蘭売買で市日二、七、谷津は絹市として絹太織売買で市日二、七である。

58 原市村 明治六年一〇月八日付、熊谷県令宛、原市村開市願人、村役人惣代、安中宿市場世話方、宿副戸長、立入副区長「奉差上御請書之事」<sup>(1250)</sup>には生糸売買開市願につき「当年中之処ハ六九ヲ以相定、来ル明治七年一月ニ至リ候ハバ二七一六ヲ除キ市日確定可仕旨御利解ニ基キ示談行届候」とある。明治三七年「便覧」<sup>(1251)</sup>には「毎月五、十の日を以て市を開く」とある。

59 松井田宿 寛延二年巳六月付、安中役所宛「上野国碓氷郡五科村差出帳」<sup>(1252)</sup>に「市場松井田宿 但シ薪絹麻布出し売申候、市役等者差出不申候」とあり、安永二巳年八月付「伝馬町差出銘細書上」<sup>(1253)</sup>の近辺市場に松井田、板鼻は「絹麻木綿古着穀物等売買仕候」、高崎は「絹麻綿」とある。嘉永五子年閏二月付、松井田「宿方明細帳」<sup>(1254)</sup>には「当宿市場ニ御座候、

三日八日十三日十八日廿三日廿八日月六斎」「三八市日ニ御座候」とあり、辰(安政三年)五月付「中山道高崎板鼻安中松井田坂本五ヶ宿盛衰其外内調書上」<sup>(125)</sup>に「当宿市日三八之日月六済ツ、市相立、殊ニ信州六米穀等附出し売買賑ひ候儀ニ御座候」とある。明治六年一〇月付、熊谷県令宛、松井田宿市場世話方惣代、役人惣代、立会人、戸区長「恐乍以書付御届奉申上候」<sup>(126)</sup>には「前々より三八一六両様設立罷在、然ルニ三八ハ売買共不都合少からず、素より一六ハ一般適宜ニ付、因テ去申九月中前書三八相廃シ、弥以一六老方と確定致及開市、即今迄立来申候間」とある。同二三年「年報」には松井田市として生糸、古着并ニ雜品売買で市日一、六であり、同三七年「便覧」<sup>(127)</sup>の市日も同様である。

60 安中宿 延宝元年丑十一月九日付、御奉行所宛、伝馬町中内蔵之助「乍恐口上書を以申上候御事」<sup>(128)</sup>に「伝馬町市先規より三場ニ相定り候処」「絹綿麻先規より三場之市ニ而売買」だが近年は方々の辻買がある。「帷子呉服小間物うら物梳商人」は宿があつても日々市場へ下らない事、「穀物其外色々みだりニ御座候事」、「絹麻嶋買商人宿三ヶ所之市場へ付々ニ被 仰付被下候御事」とし、在々からの薪の市場での売買を願っている。同年十一月一七日付、成田十右衛門、田中市右衛門「伝馬町市町定之事」<sup>(129)</sup>には「上町中町下町三段順番ニ市立テ可申事」とあり、この後書として享保二酉年七月朔日付、下野尻村、谷津村、上野尻村各名主宛に大見三右衛門、木材権右衛門は「尤も絹之儀者別而脇売脇宿罷成間敷候間」としている。安永二巳年八月付「伝馬町差出銘細書上」に「当宿市場毎月二日七日十二日十七日廿二日廿七日、絹麻綿木綿古着小間物塩茶穀物等売買仕候」とある。<sup>(130)</sup>嘉永五年子丑二月付、宿々取締役役人衆中宛、「安中宿銘細帳」<sup>(131)</sup>に当宿市場は上記「書上」と同様である。安政二卯年六月付「爲取替議定之事」には「伝馬町市之儀者は迄之通一ヶ月六済二七相建可申事」とあり、「中山大概帳」<sup>(132)</sup>も月並六度二、七の市日とある。明治二三年「年報」の安中町大字伝馬町に糸市として提糸売買市日二、七とあり、同三七年「便覧」<sup>(133)</sup>も市日同様である。

(吾妻郡)

61 長野原町 天和元酉歳「上州利根郡沼田領鄉村品々記録」の沼田領立市候町之事に長野原町は「是ハ極月計市立申

候」とあり、明和元年申九月付、鵜飼左重郎役所宛、草津村、前口村、小雨村「三ヶ村銘細村差出書上帳」<sup>(1264)</sup>の前口、小雨分に「最寄市場長野原町極月廿二日廿七日老ヶ年兩日立申候」とあり、明治三十七年「便覧」<sup>(1265)</sup>には「農商兼業の者多く、毎月四九の日を以て市を開く」とある。

62 大笹村 天和元酉歳「上州利根郡沼田領鄉村品々記録」には一ヶ月六度宛とあり、享保六年丑三月付、代官宛、名主組頭「乍恐以書付奉願候」<sup>(1266)</sup>に「大笹村之儀、月二六度之市立来候得共、洗立不申迷惑仕候、依之四月七月兩度二廿日之穀市二仕度奉願候」とあり、寛保二年戌八月付「上野国吾妻郡大笹村指出帳下書」<sup>(1267)</sup>に「当村市場二而、月二六度朔日六日十一日十六日廿一日廿六日、惣而穀類木綿布綿茶たばこ炭薪売買仕候」とある。

63 須川町 貞享四年卯九月付、代官宛、須川町名主、年寄「乍恐以口上書御訴訟申上候御事」<sup>(1268)</sup>に「先年者市場に御座候処に中絶仕候二付、(中略)先規之通り市場二被 仰付被 下候者難在可奉存候」とある。

64 中之条町、65 原町 天和元酉歳「上州利根郡沼田領鄉村品々記録」には中之条町、原町は共に「一月二六度宛、但中之条、原町之儀八月替リニ市立申候」とあり、同三亥年八月七日付、中之条町名主役人中宛、原町名主、年寄、西中之条村、郷原村各一人「一札之事」<sup>(1269)</sup>には「中之条町二而先規一六之市立来候を、当町二而一六之市立仕候二付(中略)、如先規之中之条町二而朔日六廿六日迄六斎相立、当町二而八三日六廿八日迄六斎相立可申候」とある。享保七年寅一〇月付、代官役所宛、四万村「村指出案詞」<sup>(1270)</sup>は「市場之義ハ原町中之条町一月六度ニ御座候、是ハ薪炭出し売申候」とし、同一六年亥六月付「上野国吾妻郡中野条町明細帳」<sup>(1271)</sup>に「当町市立朔日六日十一日十六日廿一日廿六日、市立之義ハ先規八月六さい立来申候所、真田伊賀守様御代ニ原町へ借シ、無撓月替ニ立申由被 仰付、月替ニ市相立方々商人入込申候、売買之義ハ塩茶薪炭木綿たばこ其外穀物麻少々宛売買仕候」、「当町市日二四万村々御運上之板木小割付出シ商人当町へ売買仕、此外二近郷近村六尺三寸貫木板出売買仕候」とある。

元文三年午正月日付、原町「御普請仕来之訳明細帳」<sup>(1272)</sup>に「村柄賑之儀ハ朔日六日十一日十六日廿一日廿六日老ヶ月二六

度宛中ノ条町と壱ヶ月替ニ市立申候」とあり、明和五年子二月付「原町明細差出帳」<sup>(1273)</sup>は中野条町と一ヶ月替り、市日の点は上記同様で「売買之儀ハ塩炭薪真綿木綿麻布其外米杯」とある。

文政七年申九月付、清水殿役所宛、中之条町「高反別小物成諸運上並稼方書上帳」<sup>(1274)</sup>には「当町六斎市立来定日朔日六日十一日十六日二十一日二十六日、右の通先規より毎月六斎ニ立来候処、万治三子年真田伊賀守様御領分之節、原町三八六斎之市立不申候ニ付、原町江口□□賃立候様被仰付、無拠今以月賃物煩敷奉存候」、「当町市場米相場書上来申候、但シ壱ヶ年内、正月廿一日、四月十六日、七月十一日、十月十六日、右四ヶ月原町月番ニ相当り候而も当町より計り、先規より御役所様江差上来り申候市場ニ相違無御座候」とある。

明治三三年「年報」に、中之条町は中ノ条市として繭糸雑品売買で市日一、六、原町は原町市として繭糸雑品売買で市日一、六であり、同三七年「便覧」<sup>(1275)</sup>にも中之条町市日は同様、原町は半商半農として市日同様である。

#### (甘楽郡)

66 下仁田村 元禄二年巳七月付、代官宛「上野国甘楽郡南牧領塩沢村差出」<sup>(1276)</sup>に「当所近郷之市場下仁田道法壱里半程」とあり、享保七年寅正月付、代官宛「上野国甘楽郡六車村明細書差出帳」<sup>(1277)</sup>には「下仁田市場へ三里」、つぎに宝暦九年卯四月付、会田伊右衛門役所宛、星尾村「村差出帳」<sup>(1278)</sup>に「下仁田市ニて諸用相達申候」とあり、天明八申年五月付「下仁田村銘細帳」<sup>(1279)</sup>に「当村市場御座候、壱ヶ月九度宛相立、二日五日九日十二日十五日十九日廿二日廿五日廿九日、右之通市立申候、信州へ出候米麦雜穀絹麻紙薪商売仕候」とあり、文政一〇年亥二月付、羽沢村「村差出帳」<sup>(1280)</sup>に「下仁田村市江三里半余御座候」とある。年欠、砥沢村名主、村々廻り人宛、下仁田町名主「一札之事」<sup>(1281)</sup>には「当町市場売買之品々之内、紙楮胡弱并藁繩之類近年売買猥りニ相成」とある。そして明治三三年「年報」は下仁田町で、下仁田市として繭糸紙楮雜穀雜品売買で市日二、五、九、同三七年「便覧」<sup>(1282)</sup>の市日も同様である。

67 砥沢村 享保七年正月付「上野国甘楽郡六車村明細書差出帳」に「砥沢石市へ廿里程」とあり、宝暦九年四月付、星

尾村「村差出帳」には「砥沢村穀市」とある。文政一〇年亥二月付、羽沢村「村差出帳」も「砥沢村穀市」としている。<sup>(128)</sup>

68市之萱村、69本宿村 天明五年正月付、上州甘楽郡市ノ萱村、三ッ瀬村惣代文助、和助「乍恐以返答書奉申上候」<sup>(129)</sup>には、市之萱村は信州上州境の村であり「信州村々々何れ之村方へ附送荷物不残私共村方ニ而荷放シ仕、又者預り置附送り仕候二付、米荷物之義も従前々預置、売度旨申之もの荷物之義者売買仕来り候」として事実上米売買が行なわれていたとし、前年の諸国一統穀物高直のため本宿村穀屋が申合せノ買を行なった結果、「近辺村々々私共へ相頼候故、穀物売買遣候処、去十月頃々別而繁昌仕、当二月中既ニ相談仕新市之儀御願申上、末々市場にも相成候得者近村之勝手合ニ相成候」と願出たものである。これに對して同年四月付、遠藤兵右衛門役所宛、本宿村与次右衛門、弥左衛門「乍恐以書付御訴訟奉申上候」<sup>(130)</sup>は「当村之儀従往古々月九日ツ、市相建、信州村々々附出候穀物売買仕」る村であり、これに對して「当二月七月初日ニ而九ツ、右市ノ萱村ニ新市相立、信州村々々附出候荷物引留売買仕候二付」として反對している。

ついで寛政九巳年六月付、吉川栄左衛門、近藤初四郎役所宛、訴訟人本宿村穀屋、附添人兼百姓代、与頭、相手市萱村源兵衛代兼、百姓代・下仁田村穀屋惣代、年寄、扱人岩鼻村藤屋清之丞、各宿「差上申済口証文之事」<sup>(131)</sup>は、同八年に本宿村穀屋から市ノ萱村へ市場一件で出訴したが、「先御裁許之通り急度相守リ可申旨嚴重被仰渡候処、当春中々尚又御裁許相破新市相建売買仕候二付」とあるから、市ノ萱村市は不許可だったが問題が再燃である。市ノ萱村が「先御裁許急度相守、尚又去辰年中嚴重被仰付候趣承知奉畏候、殊更村方ニ限り市日と申定日も無之、信州々附出候穀物買入之義、下仁田、本宿両村市日を除間々之日少々ツ、買入売出候而已之所」であるのに新市申立は不可とし、結局今後も市ノ萱村の新市は不可で、本宿、下仁田両村市日を除き相對で穀物売買としている。

70一ノ宮町(村) 明和元年申閏一二月付、鵜飼佐十郎・前沢藤十郎・岩出伊右衛門各各手代宛、一宮町「(明細帳)」<sup>(132)</sup>に「当所町並ニ而市場ニ御座候、巷々月二六度、二日六日十一日十六日廿一日廿六日市立来り申候、尤惣而困窮之場所ニ而賑ひ之所ニハ無御座候」とあり、同年閏極月付、上記三手代宛、神原村「村明細帳」<sup>(133)</sup>は他領之市として一ノ宮町、富岡

村、下仁田村をあげ「絹を売夫食薪買申候」とある。

71 富岡町 寛延二年巳七月付、安中役所宛、谷津村組頭、名主「甘楽郡富岡市之訳」<sup>(128)</sup>は町鎮守諏訪神社では「廿七日町日と申候而鎮守参詣等仕候、依之いつとなく七日十七廿七日二者在々より商買物持参仕、明暦年中の弥相賑イ富岡中町市と罷成申候、寛文年中、上町、瀬下町江三斎宛小市相立、只今者大市小市九斎とも二繁昌仕候」とあり、寛政二年三月付、恒岡金之丞内宛、「上野国甘楽郡富岡町明細帳」<sup>(129)</sup>は上、上横、中、中横、下横、瀬下町について「右三町之内、往古の毎月三七十之市場二而月九度つ、市相立申候」とある。文政元年寅七月日付、二拾三日市場、十日市場、問屋、名主、組頭、奥書四寺、取嚙人、立会人「済口爲取替一札之事」<sup>(130)</sup>は「往古より一日下モ市、十日上市、廿三日中市と相定」とある。明治二三年「年報」は富岡上町市として繭生糸類并二生皮葶売買で市日一日十三日二十日、富岡中町市として浜熨斗真綿売買で市日七ノ日、富岡下町市として絹太織并紙売買で市日三日十日三十日である。同三七年「便覧」<sup>(131)</sup>は市日一、三、十である。

72 宮崎村 明和子(五)年付、役所宛、下丹生村「明細帳」<sup>(132)</sup>に「市場之儀者宮崎、一ノ宮江罷出候」とある。

73 白井村 延宝五年巳四月二一日付、白井村惣百姓、番頭宛、「伊奈左門公被下置候白井市日御証文写」<sup>(133)</sup>は「壹ヶ月七日二相定候」とあり、「群馬県史」<sup>(134)</sup>は「三、七、十一、十六、二十、二十四、二十八に市が開かれた」としている。文政七申年壬八月付、榑原村枝郷白井百姓代、年寄、問屋、与頭、名主、新羽村立入人「爲取替申書付之事」<sup>(135)</sup>は「白井村市日之儀ハ先年の朔日三八与日限相極居候得共、中代万端等閑二相成候故、今般両村役問屋商人相談之上相改候事」とあるが、具体的な事は不明である。

74 万場村 寅一二月付、宛欠、万場村役人、世話人「市日」<sup>(136)</sup>は「正月十八日廿五日、二月廿三日廿八日、七月三日八日十三日、八月十五日、十二月十三日十八日廿三日廿八日、此外模様次第追々市日相殖し候積り、且又春紙市、夏秋糸市も立候積り御座候」とある。

75 福島町(村) 明治三三年「年報」には福島市として繭生糸屑物売買で市日九とある。

注

- (1129) 「新編埼玉県史」資料編10近世I三八〇頁。
- (1130) 「同右」同10同I七八八頁。
- (1131) 「新編武蔵風土記稿」一一卷三二二頁。
- (1132) 本庄市史編集室編「本庄市史」資料編文書三八五頁、「武蔵国村明細帳集成」二五三頁。
- (1133) (1139) 「本庄市史」資料編文書三九四頁。
- (1134) 「近世交通史料集」五卷一二四頁。
- (1135) 「新編埼玉県史」資料編10近世I三七五頁。
- (1136) 「同右」同10同I七八九頁。
- (1137) 「新編武蔵風土記稿」一二卷一〇頁。
- (1138) 「本庄市史」資料編文書三八五頁。
- (1140) 「新編武蔵風土記稿」一二卷一二頁。
- (1141) 神川町、神川町教育委員会編「神川町誌」資料編五六五頁。
- (1142) 「新編武蔵風土記稿」一二卷一〇五頁。
- (1143) 「同右」一二卷一一九頁。
- (1144) 「新編埼玉県史」資料編10近世I三九七頁。
- (1145) 「新編武蔵風土記稿」一二卷一三三頁。
- (1146) 「同右」一二卷一五二頁。
- (1147) 「新編埼玉県史」資料編10近世I三九〇頁。
- (1148) 「同右」同10同I七八九頁。
- (1149) 「新編武蔵風土記稿」一二卷一八六頁。埼玉新聞社編「秩父地方史研究必携」II近世一八七—一八八頁、秩父市誌編纂委員会編「秩父市誌」三四八—三六五頁参照。なお享保七年寅七月付、河原清兵衛役所宛「武蔵国秩父郡上名栗村差出明細帳下書」



〔武蔵国村明細帳集成〕一六四頁に「秩父大高市場江六里」として市日一六としているのは秩父大宮ではあるまいか。原史料を見  
ていないので確言はできないが。

〔新編埼玉県史〕資料編10近世Ⅰ四〇〇頁。

〔新編武蔵風土記稿〕一二卷二五二頁。吉田町教育委員会編「吉田町史」二四七—二五三頁、「秩父地方史研究必携」Ⅱ近世一  
八九—一九一頁参照。

〔新編埼玉県史〕資料編10近世Ⅰ三九九頁。

〔同右〕同10同Ⅰ七八九頁。

〔新編武蔵風土記稿〕一二卷二七六頁。

〔武蔵国村明細帳集成〕一二二七頁。

〔新編武蔵風土記稿〕一二卷三〇一頁。

〔新編埼玉県史〕資料編10近世Ⅰ七八九頁。

群馬町誌編纂委員会編「群馬町誌」資料編2近世一六二頁。

高崎市史編さん委員会編「高崎市史」三卷一八七頁。

高崎市編「高崎市史」下巻二九七—二九八頁。

前橋市史編さん委員会編「前橋市史」六卷資料編1五四三頁。

〔新編武蔵風土記稿〕一三三三、一四一、一五一頁。近藤義雄校註によると、本町は幕末  
には生糸の出来る五月から八月頃まで開市されたとある。

〔群馬県史〕資料編10近世2五五一頁。安中文化会編「中山道安中宿本陣文書」四〇五—四〇六頁。

〔中山道安中宿本陣文書〕四三六頁。

〔群馬県史〕資料編10近世2五九三—五九四頁。

〔近世交通史料集〕五卷一六〇頁。

高崎市史編さん委員会編「新編高崎市史」資料編6近世Ⅱ三四一—三四二頁。

〔国府村誌〕七七三頁。

〔高崎市史〕三卷四六八頁。

〔群馬県史〕資料編18近代現代2二二五—二二九頁。これによる群馬県市分布図が「同上」資料編25民俗Ⅰ六九三頁にあ

る。なおこの「市場」については以後注記しない。

〔1171〕田口浪三編輯「群馬県營業便覧」繁昌記八頁。

〔1172〕「群馬町誌」資料編2近世一六二頁。

〔1173〕坂上村誌編集委員会編「あがつま坂上村誌」六九頁。

〔1174〕「群馬県史」資料編10近世2三二五頁。

〔1175〕「同右」同10同2四四〇頁。室田町誌編集委員会編「室田町誌」六六八―六七二頁参照。「室田町誌」によると「市日は上町が朔日、十一日、二十一日、下町が六日、十六日、二十六日であつた」。

〔1176〕榛東村誌編さん室編「榛東村誌」二二八頁。

〔1177〕「群馬県史」資料編13近世5五〇〇―五〇三頁。渋川市市誌編さん委員会編「渋川市誌」五巻歴史資料編六五五―六五七頁。

〔1178〕「群馬町誌」資料編2近世一六二頁。

〔1179〕「群馬県史」資料編13近世5一四八頁。北群馬・渋川の歴史編集委員会編「北群馬・渋川の歴史」七〇八頁。

〔1180〕「群馬県史」資料編13近世5一五六頁。「渋川市誌」五巻歴史資料編一七〇頁。なお表紙では明和元年甲申十二月である。

〔1181〕「群馬県史」資料編13近世5一六二頁。

〔1182〕「渋川市誌」五巻歴史資料編一九〇頁。

〔1183〕「群馬県史」資料編13近世5一〇八頁。

〔1184〕「群馬県營業便覧」繁昌記一二頁。

〔1185〕「群馬県史」資料編13近世5五二二頁。

〔1186〕「同右」同13同5五二二頁。

〔1187〕「同右」同13同5五二三頁。

〔1188〕倉渕村誌編集委員会編「倉渕村誌」一二三八頁。

〔1189〕「群馬県史」資料編10近世2三〇六頁。

〔1190〕「あがつま坂上村誌」七二頁。

〔1191〕「倉渕村誌」一一四三頁。

〔1192〕「群馬県史」資料編13近世5一三九頁。

〔1193〕「同右」同13同5五一頁。

- 〔1194〕「前橋市史」六巻資料編1五二〇頁。  
 〔1195〕「群馬町誌」資料編2近世一六二頁。  
 〔1196〕「同右」同2同1七五頁。  
 〔1197〕「前橋市史」三巻一四六頁。総社町誌編集委員会編「総社町誌」一六二頁参照。  
 〔1198〕吉岡村誌編集室編「吉岡村誌」二四三頁。「総社町誌」一六二頁に寛延二年「高井村銘細帳」、延享四年「植野村銘細帳」に絹について同様の記述がある。
- 〔1199〕「前橋市史」六巻資料編I五四三頁。  
 〔1200〕「国分村誌」七七三頁。  
 〔1201〕倉賀野雁会編集委員会編「文献による倉賀野史」三巻(宿場編)一七七頁。「新編高崎市史」史料編6近世II四九四頁。  
 〔1202〕「文献による倉賀野史」三巻(宿場編)一九三頁。「近世交通史料集」五巻一四五頁。  
 〔1203〕「文献による倉賀野史」三巻(宿場編)二〇五頁。  
 〔1204〕元惣社村誌編集委員会編「元惣社村誌」九五―九六頁。「前橋市史」三巻一四三―一四四、一四六頁。  
 〔1205〕「前橋市史」三巻一四二頁。  
 〔1206〕「新編高崎市史」資料編6近世II三四一頁。  
 〔1207〕「前橋市史」三巻一〇五―一〇九、一二一―一二四頁。  
 〔1208〕「群馬県史料集」一巻風土記篇(1)一七、二四頁。国書刊行会編「続々群書類従」八巻八六五頁。  
 〔1209〕「群馬町誌」資料編2近世一六二頁。  
 〔1210〕「群馬県史」資料編13近世5―一九頁。  
 〔1211〕「同右」同14同6五一七頁。  
 〔1212〕「前橋市史」三巻一二五―一二六頁。なお本町以外の散市については「同上」三巻一二四―一二六頁参照。  
 〔1213〕「同右」三巻一二八―一二九頁。  
 〔1214〕「同右」三巻一二一―一二五頁。  
 〔1215〕「同右」三巻一二四二頁。  
 〔1216〕「群馬県營業便覧」繁昌記六頁。  
 〔1217〕前橋市立図書館編「前橋藩松平家記録」五巻二四六―二四七頁。

- (1218) 島本得一編「堂島米会所文獻集」六二—六四頁。国書刊行会編「徳川時代商業叢書」二卷五八—六一頁。
- (1219) 「前橋市史」三卷一三七—一三八頁。この願書の次に文政六癸未年一〇月付、御代官役所宛、願人川通上八崎村清八として「文言右同断」とあるが具体的な事は不明である。
- (1220) 「群馬県史料集」一卷風土記篇(1)一八、二四頁。「続々群書類従」八卷八六五頁。
- (1221) 「前橋市史」六卷資料編I五六一頁。
- (1222) 大胡町誌編集委員会編「大胡町誌」二九二頁。
- (1223) 「群馬県營業便覧」繁昌記一一頁。
- (1224) 「群馬県史料集」一卷風土記篇(1)二四頁。「続々群書類従」八卷八六五頁。
- (1225) 「群馬県史」資料篇15近世7一二六頁。
- (1226) 「同右」同15同7六四一頁。
- (1227) 「同右」同12同4五五六頁。
- (1228) 「同右」同12同4五五六—五五七頁。
- (1229) 「同右」同14同6三三四頁。
- (1230) 上郊村誌編集委員会編「上郊村誌」一二二頁。
- (1231) 「群馬県史」資料篇12近世4六九頁。
- (1232) 「同右」同12同4一〇五頁。
- (1233) 沼田市史編さん委員会編「沼田市史」資料編2近世五四七—五四八頁。「同上」通史編2近世四六一—四六四頁参照。
- (1234) 「同右」資料編2近世三一六頁。
- (1235) 「群馬県史」資料篇12近世4六九頁。
- (1236) 「同右」同12同4五五四頁。
- (1237) 「同右」同12同4五五七—五五八頁。
- (1238) 「同右」同12同4五七三頁。
- (1239) 「同右」同12同4五七二—五七三頁。
- (1240) 「同右」同12同4五五五頁。
- (1241) 「同右」同12同4五五九頁。

- (1242) 桃野村誌編纂委員会編「桃野村誌―月夜野町誌・第一集―」四九五―四九六頁。
- (1243) 「群馬町誌」資料編2近世一六二頁。
- (1244) 「群馬県史」資料編10近世2五九四頁。
- (1245) 「近世交通史料集」五卷一六九頁。
- (1246) 「群馬県營業便覧」繁昌記二五頁。
- (1247) 里見村誌編纂委員会編「里見村誌」八六八―八七一頁。
- (1248) 「同右」八七一―八七三頁。
- (1249) 「中山道安中宿本陣文書」二六五―二六六頁。「群馬県史」資料編10近世2四四五―四四六頁。
- (1250) 「中山道安中宿本陣文書」二七〇頁。なお文政元年寅八月八日付、安中役所宛、伝馬町年寄問屋、同町上中下市場小前惣代「乍恐以書付奉願上候」(「群馬県史」資料編10近世2四三六頁)には「原市村ニおゐて(安中)市六斎度毎近村々持出之絹引留買取候故」とある。
- (1251) 「群馬県營業便覧」繁昌記二四頁。
- (1252) 「群馬県史」資料編10近世2二九四頁。
- (1253) 安中市誌編纂委員会編「安中市誌」三〇一頁。
- (1254) 「中山道安中宿本陣文書」四五七頁。「群馬県史」資料編10近世2五八二頁。
- (1255) 「群馬県史」資料編10近世2五九六頁。
- (1256) 「中山道安中宿本陣文書」二六九頁。
- (1257) 「群馬県營業便覧」繁昌記二四頁。
- (1258) 「群馬県史」資料編10近世2四四二―四四三頁。
- (1259) 「同右」同10同2四四四頁。
- (1260) 「中山道安中宿本陣文書」二五一―二七〇頁に市場関係が収録されている。天保二年に始められ二、三年を費したといわれる「安中志」(「群馬県史料集」一卷二〇六頁)の神社之部に「△牛頭天皇 祭神須佐之男命 昔井伊兵部少輔此地に市を立る事を免したる時、土人本町の守護神として尾張津嶋より勧進し高札のうしろへ鎮座なさしめたりとぞ」とある。「安中市誌」三三三―三三五頁参照。
- (1261) 「中山道安中宿本陣文書」四三六頁。「群馬県史」資料編10近世2五六七頁。

- 〔近世交通史料集〕五卷一八〇頁。  
 〔群馬県營業便覧〕繁昌記二三頁。  
 〔群馬県史〕資料編11近世3二〇八—二二二頁。  
 〔群馬県營業便覧〕繁昌記二二頁。  
 〔群馬県史〕資料編11近世3五〇九—五一〇頁。  
 〔同右〕同11同3二〇〇頁。嬬恋村誌編集委員会編「嬬恋村誌」上卷六三九頁。  
 〔群馬県史〕資料編12近世4五五五—五五六頁。  
 〔同右〕同11同3五〇七頁。  
 〔同右〕同11同3一八五頁。  
 〔同右〕同11同3一九二頁。中之条町誌編集委員会編「中之条町誌」一卷三九一—三九八頁参照。  
 原町誌編集委員会編、新井信示執筆「原町誌」四九七頁。  
 〔同右〕五〇八頁。  
 〔中之条町誌〕資料編一八〇頁。「群馬県史」資料編11近世3五二〇—五二二、五二三—五二四頁参照。  
 〔群馬県營業便覧〕繁昌記二五、二六頁。岩島村誌編集委員会編「岩島村誌」五〇九—五一二頁参照。  
 南牧村誌編さん委員会編「南牧村誌」二三七頁。  
 〔同右〕二四六頁。  
 〔同右〕二五〇頁。  
 〔群馬県史〕資料編9近世1三二〇頁。  
 〔同右〕同9同1三二四頁。「南牧村誌」二五三頁参照。  
 〔群馬県史〕資料編9同1六三六頁。  
 〔群馬県營業便覧〕繁昌記二二頁。  
 〔南牧村誌〕二五三頁。「群馬県史」資料編9近世1三二四頁。  
 〔群馬県史〕資料編9近世1六二四—六二五頁。  
 〔同右〕同9同1六二五—六二六頁。  
 〔同右〕同9同1六三一—六三三頁。

- (1287) 「富岡市史」近世資料編三〇〇頁。  
 (1288) 「同右」同二九八頁。「同上」同二九九頁参照。  
 (1289) 「群馬県史」資料編9近世1六二三頁。「富岡史」四九四頁。  
 (1290) 「富岡市史」近世資料編三〇五頁。  
 (1291) 「同右」同六三二頁。  
 (1292) 「群馬県營業便覧」繁昌記二〇頁。  
 (1293) 「富岡市史」近世資料編三〇三頁。「群馬県史」資料編9近世1二九九頁。  
 (1294) 「群馬県史」資料編9近世1六二三頁。  
 (1295) 「同右」同9同1一〇一五頁。「同上」六九一—六九二頁参照。  
 (1296) 「同右」同9同1六九二頁。  
 (1297) 「同右」同9同1六三六—六三七頁。万場町誌編さん委員会編「万場町誌」二九九—三〇〇頁参照。

追記(1)「創価大学人文論集」一〇号九三頁一行の次に左記の文を挿入する。

高山彦九郎「天明京都日記」<sup>(補11)</sup>の天明三年二月の条に次の記事がある。

二十九日、昨日御奉行丸毛和泉守殿京着のよし、昨夜大村氏にて聞ける故僕を具して、東番所へ入る、蓮治太夫宅へ至りて先ツ酒二升到草紙を寄す、治太夫父母妻子は十二日江戸立にて二十四日京着のよし、吸物酒肴にて暁に及べり、治太夫昨日主家丸毛家上着し今日も□□□□□□出で、居たりけるが予来りしと聞て下りて対す、大イニ酔ツて立ち大村氏へ寄る、金子十両を以て予が前に出だす懷中して出で、酔に因て吐たりける、未の刻に及むでしハらく雨降ル事あり、丸毛和泉守殿上下家中残らず二十四日より今日迄三ツ井より三度の食事壺汁五菜に□□□□□□硯蓋

(約一行) す、丸毛殿(約一行) 出ツ(約一行) 壺面を(約一行) (下略)

これによると高山彦九郎はパトロンの白木屋六代大村彦太郎商全から丸毛和泉守の京着を聞き、兼ねて交流のあった丸

毛家中の蓮治太夫を訪れた。治太夫は執務中だったが帰宅して酒をかわしている。彦九郎が暁になって大村家に寄り金一〇両を渡されているのは、この訪問が治太夫と白木屋との接触のためだったのだろう。そして酒の席で治太夫から三井が丸毛和泉守家中全員に食事などを供している事実を聞いたのだろう。虫損が激しく具体的な点は不明である。

つぎに京都の呉服商で薩摩、佐賀藩などの蔵元を勤め、大規模な大名貸を行っていた錢屋中島家文書に丸毛和泉守の借金<sup>(補12)</sup>の枝手形がある。次の通りである。

枝手形之事

割印

一金八両壹歩<sup>⑧</sup>

永八拾三文三分<sup>⑨</sup>

右者丸毛和泉守様江各十八軒<sup>(五カ)</sup>金百<sup>(五カ)</sup>兩御用達申處、柏原孫左衛門殿我等兩名宛御証文御渡被成、則此方預り申候、御返済之節月六朱利足<sup>⑩</sup>加、此手形を以御勘定可申候、爲後日枝手形仍而如件

天明五巳年九月

桂岩次郎<sup>⑪</sup>

中嶋利助殿

文意の取りにくい点があるが、恐らく金一五〇両を一八軒が負担し、その世話役は柏原孫左衛門と中嶋利助であるまいか。また丸毛の同僚である京西町奉行土屋伊予守については、安永八年亥一〇月付、錢屋利助宛、竹尾兵右衛門「枝手形之事」は金一〇〇兩調進の内の金四〇兩を錢屋が加入している。近江屋九兵衛と錢屋宛の御裏印付御証文を竹尾が預かっている、近江屋は金六〇兩の加入だろう。「右之金子当十二月切利足月八朱定也」である。

同九年子一二月付、錢屋利助宛、土屋伊予守内森丹下、黒瀬喜久、森治兵衛、石井惣助「枝手形」は金二〇兩で「年三ヶ度二米六俵元利之内」の条件で返済である。

また土屋の後任の山崎大隅守については次の通りである。



借用申金子之事

割印

合金五拾兩也

右者大隅守殿御勝手向就要用、被成御借用候処実正也、来五月々毎年二五十月御役料米之内を以、無相違御返并可有之処仍如件

天明五年巳二月 不破喜間多印

真野八郎兵衛印

手嶋郷右衛門印

錢屋利兵衛殿

錢屋利 助殿

(裏書)

表書之通相違無之もの也

大隅印

金五〇兩の借金である。従つて京東西町奉行は一般に京商家から広範に調達しているのだろう。

「中島家文書目録」<sup>(補13)</sup>には町奉行所同心について、天明元年五月付、中嶋左助宛、松岡勇藏他「添証文之事」、同三年六月

付、錢屋利兵衛宛、御用米会所頭取「枝手形之事(東組同心中借用銀加入二付)」、同年同月付、錢屋利助宛、丹後屋九兵

衛他「枝手形(東組同心中借用証文)」、同六年一二月付、中島利助宛、林四郎右衛門「預ケ申銀子之事(東御役所拝借銀

証文)」同七年四月付、錢屋利助宛、御用米会所「覚(池田丹後守組同心様江借り戻シ銀請取覚)」、同年同月付、錢屋利

兵衛宛、御用米会所「覚(東御組同心中様御借り戻し銀請取二付手形)」、他に年月欠「覚(東組同心中借銀残高二付)」

がある。東組同心も京東町奉行と同じ關係を伺わせる。御用米会所と東御役所との關係は今後考えたい。

追記(2)「創価大学人文論集」一一号六〇頁八行の末尾に次の文を挿入する。

この御免については、同六年八月に田沼が老中を罷免されると、「井野口屋飛脚問屋記録」<sup>(補14)</sup>に一〇月付で金一〇〇〇両を延商本紙問屋株金として差上げるから「去ル卯年迄売買致来り候通、米穀類并水油酒綿唐物業種類本紙を以延商之会所御免被成下置候ハ、乍恐 御城下益々御繁栄之爲ニも可相成哉と奉存候」として、直ちに願出ている。

追記(3)「創価大学人文論集」一四号九五頁一行の「和泉清司」「などの…」の間に「樋口節夫」を挿入する。同号一〇九頁の注(962)の末尾に「樋口節夫著『定期市』六七―七四頁」を追加する。

#### 補注

(補11) 萩原進、千々和実共編「高山彦九郎全集」二巻日記篇(二五六頁。なお同書(一八三頁)の天明二年十一月二十七日の条には「夜大村氏が語るは、赤井越前守殿江戸へ転役の事に付きて狂哥 足もとの赤井うちにと越路迄春をまたすに帰る雁金 とぞ、公郷の作なるべしとぞ」とある。

(補12) 大阪経済大学日本経済史研究所蔵

(補13) 野村君代、渡邊忠司編「日本経済史研究所蔵古文書目録」一集二二三頁。

(補14) 渡邊忠司、徳永光俊共編「飛脚問屋井野口屋記録」一巻二七七頁。